

大日經義釈における法華經の引用について

清田寂雲

大日經義釈には多種多様な仏典その他を引用して、經文の解釈に役立てゝいるが、中でも法華經が一番よく引かれる。

明らかに法華とか法華經とか標記する處と、直ちに經文又はそれから出たと想われる、文句を載せている所との二様になつていて、その合計は二百回を越えるようである。その他の

經論では例えば般若經の如き、四十何回も現れる（般若經に由來する語句を入れれば、更に多いであらう）けれども、とても法華經の比ではないと思う。私はかねてから義釈に見られる引用書・學說・譬喩などの抽出に努めているが、相当な數量に上るようである。そのうち法華經關係だけは一往整理したが、紙數の關係上こゝにその全容を掲げられないのが、残念であるけれども、ともかく法華經の註書等でなくして、これほど度々同經を引用するものは恐らく尠いであらう。但し義釈には種々の異本があり、法華經の引用においても、必ずしも諸本同一とは限らない。特に再治本と未再治本の不一致が目立つ所の、息障品第三の初から悉地出現品第六の中途まで

ゝは、法華經の引文も再治本には多く、未再治本には甚は少ない。私は曾て諸本の異同について、云々したことがあるので今回は省略するが、温古の序によつて「義釈」を一行の命名と考え、諸本の總稱とする。

一 引用の範圍

多くの品に亘るが第二章方便品が、断然多いことが分る。同品は一經の核心であるから特に重視し、度重ねて引いたものである。その回數は八十余回に上つている。中でも「唯仏与仏・乃能究了」（盡ではない、一行らの見た經文に了とあつたものか）とか、「開示悟入仏知見」の部分が特に多い。恐らく一行らの考方としては、大日經所説の法門は法華經にいわゆる唯仏与仏の境界であり、それゆゑにこそ秘密教なのであり、之を開示し之に衆生を悟入させるのが、大日經所説のさまざまな行法に他ならない、という信念にもとずくのである。後になつて台東兩密の間で一論点となつた、「菩提心論」

所引の四種阿字と四仏知見の配釈は、再治本（慈覺本）の第八卷・悉地出現品に現われており、未再治の弘法本などにはないから、再治者智儼の案出とも考えられるのであるが、実は既に一行の書いた部分（再治・未再治両系に共通）において、四仏知見のことは何度も引用されており、時には之と阿字とを關係ずけた説明もあるから、独創的と言うほどの展開とは考えられず、又決して再治者の恣意的な作為でもなく、従つて台密と東密の間で格別論争せねばならぬほどの、大問題とは思われないのであつて、多分は宗派意識に立つ一往の所論にすぎないであらう。

その他では譬喩品十七回、藥草品十四回、法師品十二回、涌出品九回、壽量品十回、法師功德品十一回、信解品九回、安樂品九回が目立ち、序品・化城品・五百品・宝塔品・提婆品・分別品・不輕品・囑累品・普門品・陀羅尼品からも、それぞれ一回乃至數回引かれており、授記品の一部も僅かに言及され、神力品からは極度の取意ではあるが、それと思われる引用があり、結局のところ全然見えないのは人記品・勸持品・隨喜功德品・藥王品・妙音品・嚴王品・勸発品の七章に限られ、他の女一章は多かれ少なかれ、引用されるか少なくとも言及されている。

二 誰が引用したか？

大日經義釈における法華經について（清田）

次にこれらのおびたゞしい法華經引用は、一体誰の所為であらうか？ 周知のように義釈は唐玄宗の開元四年（七一六）八十才で來唐した善無畏が一行の請に應じて、大日經を訳し且つ講義したのを、一行が筆記し後に整理して書物の体裁を整えた、その名称は義釈で卷数は十四であつた。けれども彼の整理は未だ不充分で、自身も満足出来ないものだつたので、臨終のとき（開元十五年）同門の智儼に遺囑してその完成を依頼した。智儼は之を受けて種々努力はしたものゝ、未だ完成に至らないうちに、開元廿三年、善無畏の遷化に遭い、止むなく之を中止せねばならなくなつた。以上が智儼と同門の温古の「義釈序」（再治本にのみあり）に記す所である。然らば法華經の引用は、もともと善無畏の講義に由来するか、それとも一行や智儼のしたことであらうか、その点を究明したいものである。

そこで本書が引く所の法華經文を、一一吟味してみると、そのすべては妙法華經からの引用であつて、正法華からと見るべきものはなく、又梵文原典からと思われるものも、見当らないようである。もつとも例外として具緣品の解釈の中に「法華有『盲人譬喩』」と、藥草品後半の日月喩を引く処がある。之は妙法華にだけ欠けている部分であるが、之とて添品法華からと考えるならば、何等問題はない筈である。するとそれはすべて一行らの中国仏教家の、手になるものであらう

か？ その辺はなお深く考えねばならないものがある、と思うのである。

義釈に引く所の法華經各品の文は、もとより多種多様ではあるが、各品の核心と云うべき点は皆その中に在り、作者・再治者の法華經に対する理解が並々でない、極めて深く且つ正確なものであつたことが知られる。殊に注意すべきものとしては、再治本義釈が第八卷・悉地出現品の解釈の中で、方便品の

諸仏両足尊 知法常無性 仏種從緣起 是故説一乘

を引いて「統論彼經深趣在斯一偈也」と云うことである。但し未再治本には全くない。羅什の訳出以来、盛唐時代に到るまで、古くは竺道生の「疏」二卷を始め、今日に残るものだけでも相当数の法華經註書があるが、この偈をもつて一經の教理的中心とする、という風な解説は管見の及ぶ限りでは見られない。強いて云えばこの偈を特に重視する点、慈恩窺基の「玄贊」に似ている、と思われる程度であらう。梵本には異本もあるし、又羅什の訳文も決して直訳ではないらしい。その詳細を論ずることは今不可能であるが、近年に至つて徳島大学の戸田宏文助教授の研究もあり、次第に解明されつゝあるのは喜ばしい。その趣旨は要するに「縁起を一乗と説く」というに他ならず、法華經教理の中心たる一乗説の論拠として、極めて重要なのは論を俟たぬ。けだし一乗の語

は古い大乘經典中にも、必ずしも稀ではないが、その体性は何であるかとなると、明確に説いたものはないと云つても宜しかろう。法華經にはそれが明々白々に示されている。而もその法華經には一乗説が中心なのである。その意味からして「彼の經の深趣を統論するに、斯の一偈に在り」とする義釈再治者の説明は、正しいと云い得る。

然らば法華經について、このような理解をもつていた者は一体誰であらうか？ 普通には記者・一行なる人は天台の流を汲む學僧であつて、その見地からして大日經の講義を聞きつけたのが、即ち「義釈」であると云われているが、事實はそう簡単なものではなく、一行はもと普寂の弟子であつたが、普寂その人が単に北宗禪の巨匠・神秀の門下というに止まらず、法華經を始め唯識・起信などの論に通じた上、恒景から律と恐らくは華嚴・天台をも學んだであらう、と云われている。それに一行自身も慧真から律、恒景（弘景）から天台・律を（恐らくは華嚴も）學んでいた上に、天文曆数にも奥義を究めるといふ風に、世出世間に亘て頗る博學な人であつた。義釈の中には曾て伝教大師が指摘したように、天台に關説する所も二、三あり、その他にも天台用語らしいものが出る処もあるが、法華經の解釈に關しては、天台の説に依つたと思われる部分は、一も発見出来ない。つまり一行自身の見識で自由に引用した、と考える以外にないようである。そこ

には学問僧としての面目が躍動していると思う。

次に智儼は同名異人が少なくないが、義釈再治者とされるのは恐らく、望月大辞典や密教大辞典にある通り、于闐国王の質子として唐へ来て、後、景竜元年（七〇七）出家して至相寺に入つた智儼であらう。彼には数部の訳出經典があり、その中には法華經藥王菩薩呪も含まれている（現存するか否か不明）から、彼が法華經に精通していたことは、間違いないであらう。

最後に疏主善無畏であるが、文献の乏しいために、彼の伝歴の詳細は不明に属し、殊にその在印中の事跡は甚だ不分明なのが残念でならないが、李華撰と称せられる善無畏の碑銘の中に、彼がインドに在つて修行中「法華三昧に入」つたとの記事がある。但しこの碑銘なる書は奇怪なことを少なからず含んでいて、軽々しくは信用出来ないとする批判が、既に早く松本文三郎博士によつてなされた。私も博士の指摘された部分は、異議なく承認すべきであると思うが、たゞ法華經の引用に関する限りは、先の方便品偈の如き、中国人らしからぬ点が認められること、普通に云うような天台流の影響がないこと、などから考えてみて、恐らくこれは一行の私見ではなくて、講義した善無畏その人が既に、インドにおいて法華經に深い造詣があり、その学識を本にして大日經の講伝をしたのではないか、その意味から右の碑銘の一節は、信用出

来るものではないかと思う。即ち私の想像では、善無畏は大日經を講義する際、折にふれては法華經を引合いに出し、法華との比較によつて門下僧たちの理解を助けようとした。それを一行や智儼らは各々筆記したり、或は記憶していて、後に整理したのではないかと考えるのである。

もし私の見方が謬りでなかつたとすれば、義釈における法華經の引用は、直接には一行や智儼のなしたことであつても、その根柢は善無畏の講義に在ると言い得よう。善無畏によつて新しいというか、純インド的な法華經觀が伝えられたのは、唐代仏教にとつて喜ぶべきことであつたが、残念ながら筆受者一行の短命と、後継者のなかつたこととで、それは広く知られるに至らず、何時しか忘れられて行つたのは惜しむべきである。

- 1 高野山大学「密教研究」八五、八六号。
- 2 但し宗淵の「法華考異」にも究了とある本のは出ていない。

- 3 天台宗教学研究「教学大会紀要」第一輯九三頁。

- 4 「印仏研」第十一卷二七二・二七三頁。

- 5 依憑天台宗にある、伝教大師全集第三・三五八頁以下。

- 6 大正藏五〇・二九〇頁中、末から三行。

- 7 「大日經の作者について」（「仏教研究」第六卷四号・大正十五年十二月）